

「臨床医学研究序説—方法論と倫理」

国立療養所東京病院名誉院長 砂 原 茂 一 著

虎の門病院院長

小 坂 樹 徳

砂原茂一先生は昭和8年東大医学部卒業後今日まで、臨床医学研究者として多くの業績を挙げられ、道一筋の指導者として活躍されておられます。

先生はこれまで優れた数々の学術書、啓蒙書を著わされていますが、本書はわが国の臨床医学研究の現状をみつめ、今一度改めて臨床医学の根源的問題に立ち帰り、その研究のあるべき姿を方法論と倫理を重点に論述されたものです。

本書は、“研究と研究者”“研究の基礎条件”“臨床医学の研究法”“臨床医学研究の倫理”、“研究の発表”の5部からなり、各部は適切な章節に分けて構成され、更に簡明な小見出しがつけられており、厳格な用語、洗練された文章と相まって、読者の理解を容易にしています。随所に歴史的に有名な科学者の言葉が引用され、確実な資料と自らの実績に基づいた明解な論述には、大きな重みと迫力があります。問題は歴史の流れの中に把えられ、その将来が指向されています。

“近代医学の進歩は周辺科学の進歩

に負うところが大きい”が、臨床医学研究は人類の福祉と、医学・医療の進歩と、目前の患者のために一刻も怠ることのできない重要な命題である……臨床研究によって発見された多くの事実や新しい法則が医療の現場に生かされ、人類の幸福に寄与してきた……分子レベルの研究の進歩により、臨床医学研究の必要性は一層増している”と指摘しています。

“臨床研究は人体と精神への侵襲を伴うので本質的には人間実験である”と位置づけ、“患者は最良の教師であり……注意深い観察こそ創造的研究の重要条件であり……読書は研究の宝の山であり……先輩・同僚との討論は触発する……これらは臨床研究の起爆剤となるが、大部分は瓦礫で、ダイヤモンドは稀である”と人間の医学の険しさを訴え、“研究者には創造力と批判力が、研究の遂行には忍耐と執拗が不可欠である”と述べています。

“臨床医学とくに治療学の最も有力な研究法は無作為化試験(RCT)で、臨床医学に科学としての骨格を与えた”ヘルシンキ宣言(東京改定)

は、“人間実験が不可欠であることを認めた上で、被験者個人の利益と福祉を科学や社会への寄与より優先する原則に立ち、研究倫理を守るための具体的手続きを明らかにした”と歴史的評価を与え、倫理的枠組として強調される informed consent の最も困難な局面となる RCT の場合を深く論じています。また倫理委員会は“人間実験の倫理規正について理性ある市民の基準を尊重して設けたもの”と位置づけています。

“臨床医学研究は日常診療の場合と同じく、医療者と患者の相互信頼を前提とした協同作業”であり、“本来きわめて厳しい倫理的・方法論的制約の下にはじめて可能であることを自覚し、臨床研究者はすすんでこの重い十字架を背負わねばならない”。先生のフィロソフィーはここに集約され、果たしてわが国ではどうかと随所に理性的・情熱的に問いかけています。

医学が科学としての道を自信をもって歩み始めた頃、自らそれを実践した Bernard が著した「実験医学序説」(1865)は、かつての医学生のアートブックの1つでした。臨床医学が科学としての体系を確立するために、その研究を推進された砂原先生の「臨床医学研究序説」は、今日、“医”に関連をもつすべての人達に是非読んで戴きたい本なのです。

A5判 250頁 図12 表13 1988
¥2,500 円300

医学書院刊